

空の旅へのいざない



松永 浩
MATSUNAGA Hiroshi
東京電力㈱

物心がついた頃から旅が好きである。両親が無類の旅好きであり、幼いころから毎年のように家族旅行をしていたので、家庭環境による影響が相当大きいと思う。

旅は歴史、地理などの知的欲求を満たし、美しい風景や自然などに触れることで精神的な安らぎを得、さらには旺盛な食欲も満足させてくれる。地元の人との出会いや、温泉では健康増進もあるかも知れない。うーん、書いているだけで行きたくなる。

旅の手段を見ると、最近では風情といった面で鉄道がさえない。新幹線は全盛である一方、旅情のある夜行列車が軒並み姿を消してしまった。昔はほとんどの特急列車にあった食堂車も、風前の灯である。駅弁ならまだしも、コンビニ弁当やおにぎりでは旅情は一向に盛り上がりせず…。採算性や合理性を追求すると、どうしても非日常としてのワクワクする魅力が減少してしまう。

反面、元気なのが航空業界である。従来のフルサービスの航空会社（レガシーと称するらしい）に対して、経済性で大きなアドバンテージを持つLCCが台頭し、世界の空を賑わしている。まだまだ海外のようなシェアはないが、2016年1月現在、日本法人として4社がLCCとしての認知を受けており、キャンペーンなどでは信じられないような魅力的な価格



海に映る春秋航空日本の機影（2015.5.9 NRT-HSG IJ601）

を打ち出し、我々を空の旅へといざなっている。

ただし、このLCC、レガシー（と言ってみる）とは異なり、注意すべき点も多い。

まず、予約は基本ウェブで、電話でオペレータに頼んだりすると数千円といった高額な手数料を要求される。航空券自体が数千円程度なのに、まるで悪魔の所業である。基本的に予約の変更や払い戻しはできない。また、受託手荷物、座席の予約などは有料である。航空券が安いからといってこういったオプションをたくさんつけると、実はあまりレガシーと変わらない値段になっていたりする。恐るべしLCC。

搭乗当日、空港（成田、関西、沖縄など）ではLCC専用ターミナルとかいう、アクセスに難があるターミナルがあてがわれていたりする。通常のターミナルから、バスや徒歩でさらに奥地に行くことになる。時間ギリギリで空港に行った場合は冷や汗もの、搭乗前にすでにヘトヘトになっている（経験談）。またこのLCC専用ターミナル、実に「安普請」極まりない。配管はむき出し、階段はバラバラのプレート、どこの倉庫だよ、といった趣である。受託手荷物の返却も、回転台などあるわけではなく、係のお兄さん達が壁の裏から、まるでマジックのように手荷物を運んできたりする。汗だくのお兄さん達を見ると、日頃何の感慨もない回転台のありがたみが身に染みる。

LCCは最小限の機体数で運用していることがほとんどで、1日のうちのどこかで遅れが発生すると代替機がないため、遅れを取り戻すことができない。なので、午後の便などは遅れることが多い。最悪なのは最終便、到着空港の門限（これを超えるとペナルティを科される）に間に合わない場合は、「欠航」などと平気でのたまうこともある。要はあまり頑張らないのである。

これらのデメリットはあるものの、やはり低廉な



ピーチ機内より神戸空港（UKB）を眺める（2015.4.30 CTS-KIX MM104）

運賃は大きな魅力である。どこへでも、何回でも、といった旅のできるのはLCCがあるからこそ。ありがたしLCC。

実際、私は東京の自宅から札幌、熊本、那覇への日帰りをLCCでトライしてみたことがあるが、思ったほどの疲れもなく、時間の使い方さえ上手くコントロールできればグルメに、観光に結構使えるし、楽しめる。機内の座席間隔は狭く、リクライニングもできない場合があるが、2時間ほどのフライトでは耐えられないことはない。あえて言えば、関東のLCCは成田空港ベースとなるので、ここまでのアクセスがたいへんかも知れない。往復スカイライナーやNEXに乗ってしまうと、LCCを選んだメリットが半減してしまう。

LCCならではのおもしろさもある。例えばピーチ・アビエーション。こちらは関西空港をハブとし、関西色を強く出している。搭乗券には「OOKINI」の文字。機内食（有料）にはお好み焼き、たこ焼きなどの「粉もん」あり。極め付けは、機内アナウンスが関西弁（というか関西アクセント）。イメージカラーのピンクと相まって、目立つことこの上ない。

同じ全日空系列のバニラエアは成田空港がハブで、新千歳、奄美大島、沖縄などに国内路線を展開しており、リゾート色を全面に出しアピールをしている。こ

ちらは路線を指定して1か月のフリーパス（乗り放題）を発行するなど、今までの航空会社にはない新たなアプローチに積極的である。

そのほか、数多くの国内路線を有し利用しやすいジェットスター、毎月のようにキャンペーンを実施している春秋航空日本など、どれも个性的で価格やサービスにその違いを楽しむことができる。

LCCは旅に対する考えを根本から変え、旅の道程のよきスパイスとなって、新たな楽しみ方を与えてくれるものである。日本ではレガシーの「全部込み」のスタイルに慣れているので、LCCが定着しているとは言いがたいが、旅のひとつの選択肢としては極めて魅力的である。海外路線も多く展開しており、旅行会社の弾丸ツアーなどにも利用されたりしているようである。今後のLCCにますます期待したい。



成田空港（NRT）に駐機するバニラエア（2015.1.23 NRT-CTS JW901）